

◎自由発表（第1会場）【座長・司会】大橋 忠司（関西地区研究会副会長）

【演題等】「1人1台端末を活用した心の健康観察とチーム学校の形成」

【講演・発表者】滋賀県栗東市立栗東中学校 校長 住吉 由加

・発表概要

「1人1台端末を活用した心の健康観察とチーム学校の形成」についての発表であった。外部支援や専用アプリは用いず、学校で Google フォームを独自にカスタマイズして運用。生徒の気分、睡眠、朝食状況などを簡易的に記録し、支援チームが週1回分析を行うことで、教員の負担を軽減しつつ早期支援につなげている。入力データからは、支援が必要な生徒の傾向や生活習慣との関連が明らかになり、養護教諭やSSWなど多職種が連携して対応。結果として教員間の会話が増え、学校全体で生徒を支える「チーム学校」の実現につながった。発表では実践の工夫と課題、今後の展望についても具体的に語られた。

・発表要旨

栗東市立栗東中学校での心の健康観察の取組を紹介した。外部支援や専用アプリは使わず、Google フォームを独自にカスタマイズして運用。生徒の気分、睡眠、朝食状況などを簡易的に記録し、支援チームが週1回分析を行うことで、教員の負担を軽減しつつ、早期支援につなげている事例を紹介した。

学校は780名の生徒に対し、教員48名と18名の専門スタッフを配置。放課後の学習支援や別室対応、日本語指導など多様な支援体制を整えており、学びの居場所も設けている。心の健康観察は、校内チームを編成して開始。SC、SSW、養護教諭、担任代表、市教委、生徒指導主事らが連携し、実施後の評価と支援体制の構築を進めた。

フォームは「元気」「気分」「睡眠」「朝食」の4項目に絞り、簡易入力を重視。入力結果はスプレッドシートに自動集計され、未回答者も把握可能。気分が悪い日が続く生徒にはアラートが出る仕組みも導入。支援部会では週1回、データをもとに個別支援を検討し、教員間で情報共有を進めている。

アンケート分析では、2年生の意識が1年生より有意に低く、ターゲット層の特定に役立った。また、入力のみで支援につながった生徒も一定数存在し、保健室にこない生徒の実態把握にも貢献。生活習慣との関連も明らかになり、朝食や睡眠の重要性を生徒自身が認識するようになった。

成果としては、教員間の会話が増え、支援体制が強化されたことが挙げられる。担任以外の教員が声をかけることで、生徒の安心感が高まり、学校全体で支える「チーム学校」の形成につながった。課題としては、SCにつながるレベルの生徒が入力しない傾向があり、データだけに頼らない支援の重要性が指摘された。

今後は、長期休業中の対応や、行事前後の心の変化の把握など、データの活用範囲を広げることが検討されている。記述式の導入については、教員の負担や管理上の懸念から見送られているが、簡易な記録でも十分な効果が得られていると報告された。

・質疑応答の概要

Q1 「自己管理能力の育成」について、生徒自身が過去の入力データを振り返り、調子の波を把握できるような仕組みがあれば、カウンセリングや声かけのきっかけになるのではないか。

A1 個別フィードバックは難しいが、曜日ごとの傾向や行事前後の変化など、全体傾向の分析には活用している。行事が必ずしも楽しいとは限らないという気づきも得られた。

- Q2 「記述式の導入」について、いじめ調査との連動や、困りごとの自由記述を加えることで、より深い情報が得られるのではないか。
- A2 記述式は教員の負担が大きく、管理上のリスクもあるため導入していないと説明。職員の合意のもと、簡易な形式で継続している。
- Q3 「長期休業中の対応」について、夏休みなどの期間に生徒の心の状態を把握する方法はあるか。
- A3 タブレットを持ち帰ることで休み明けの不安を事前に把握し、必要に応じて家庭訪問などの対応を検討している。また、虐待やヤングケアラーへの対応として、相談窓口のカード配布や別室開放などの支援策も紹介された。